

オーストラリア競馬概要 3

一連の流れ

オーストラリアで人気があるのは何度も言っているとおり2歳戦、そしてスプリント戦になります。ここでは馬齢ごとにどのように競馬界が動くかを紹介します。

・当歳~1歳

2歳戦が主流なだけあって有力馬はとにかく早熟です。セリは1歳が中心でそこまで牧場で育成されます。1歳になるとセリにかけられ、時期が来たら入厩します。この時期から結構な馬が去勢されるみたいです。

・2歳

2歳戦は9月から始まります。目指すは3月の**ゴールドスリッパー**。馬齢が加算されるのが8月なので日本に置き換えると、2月にデビューして8月にダービーがあるようなものだから驚きです！(逆に日本のデビュー時期が世界的に見て結構遅いというのがあります)

デビューするにあたりトライアルにでます。有望な馬達はここである程度の格付けがされることもあり、今後のローテーションにも響きます。

そしてここから熾烈な賞金レースが始まります。

賞金を加算できた馬はゴールドスリッパーに出走し、それができなかったり、体調が整わなかった場合は4月の**サイアーズプロデュースS**や**シャンペンS**に向かうことが多いです。この3競走は**オーストラリア2歳3冠**ともいわれています。直近では2012年にPierroが3冠を達成しています。

しかし実際多くのゴールドスリッパー勝ち馬、出走馬は3歳まで休養します。**2歳即引退！種牡馬入り！**みたいなことは案外少なく、早くても3歳前半までは使います。

・3歳

3歳路線も2歳戦に及ばないまでもかなりの人気を博し各州を代表するダービーやオークスが開かれます。

中長距離のレースも多く施行され、2歳に間に合わず自己条件を戦ってきた馬たちが多く出てきます。中長距離に強いNZ馬もこの辺から活躍が目立ち始めます。

一方スプリント~マイル~2000mあたりの世代トップクラスの馬には春シーズンから果敢に古馬戦に挑むものも多くいます。日本でいうと高松宮や大阪杯あたりの時期ですね。

・古馬

中長距離ではコックスプレートやメルボルンC、コーフィールドCなどのビッグレースが行われます。が、この頃になると欧州やNZから有力な遠征馬、移籍馬に上位を席卷され、「狩り場」と言われるのも仕方ない感じですね。一応勝ち負けできるオーストラリア馬も毎年2~3頭います。

短距離路線は依然として高レベルな戦いが繰り広げられています。G1ではありませんが、芝の世界最高賞金額を誇る**ジ・エベレスト**なんか有名ですね。

高レーティングの謎

古馬中長距離G1についてよく言われるのがIFHAによるレースレーティングが実レベル以上に過剰評価されていないか？ G1の数もレベルの割には多くないか？という意見です。

毎年ベスト20に複数ランクインしますし、トップ5に入ることもあります。これについてよく耳にするものや私的な考察を述べていきます。

1.移籍馬と遠征馬の存在

毎年多くの欧州馬がオーストラリアにやってきますが、その馬達が自国で高いレーティングをつけてきてくれるため、オーストラリアでのレースレーティングもあがっているという話。これが1番多く耳にします。

以下は私の考察です。

2.2歳戦が充実しているから

2歳から多くのリステッド競走や重賞が行われているためレーティング持ちの馬もたくさんいることになります。そのため競走馬全体の(レーティング的な意味での)土台が比較的高くなっているのではないかと思います。

逆の例として日本の短距離路線、ダート路線があげられます。近年こそ世界で活躍するその路線の日本馬が何頭か出てきていますが、2歳3歳でリステッド以上のレースがとて少ないのでレベルの割にはレーティングが低いですし、そう感じている人も結構いるんじゃないでしょうか？

3.出走頻度

オーストラリアの馬は他国の馬より圧倒的に多くのレースに出走します。その中には殆どのレースで1着や2着になるような活躍馬が毎年何頭かいて、それらの馬のおかげで多くのG1が高レーティングを維持しているのではないかと考えています。

オーストラリア競馬の間

高額賞金レースがたくさんあるオーストラリア競馬は一見馬主達にとって天国のように感じますが、負の側面も存在します。

例えば登録料です。高額賞金リステッドなどが特に顕著なのですが出走登録がかなり高額になり、ジ・エベレストの場合5着以内に入着しないと赤字になってしまいます。また日本よりは安いですが当然預託料もかかりますし、遠征費も自腹。特にオーストラリアは移動距離が長くなるので結構な額するみたいです。そういうこともあり、誰でも馬主になれるオーストラリアではより投資の額を抑えるために早熟の2歳戦が人気になっていくわけですね。早熟を求めるあまり1200mですら長い馬もいたりして早熟信仰に対し疑問をもつ声もあります。